

アメリカの大統領選挙が終わったの感想

アメリカの大統領選挙は事前の予想どおりの結果となりました。本番の選挙では、ブラッドレー効果によって、オバマが苦戦するのではないかという見方もありましたが、結果的にそういうことはなかったようです。

私は、今回の選挙でオバマを一番助けたのは、実はブッシュ大統領だったと思います。第一に、ブッシュが主導したアフガニスタン侵攻とそれに続いて更に強引に始めたイラク戦争が泥沼化したこと、第二に、個人の自由と責任を重視する共和党の伝統的な考え方に基づいて、政権独特の経済運営を徹底的に押し進めた結果、アメリカ経済は危機的な状況に陥り、それが世界に波及しつつあること、これら2つの負の要因が誰の目にも明らかになってしまっただけで、共和党からの候補者には決して勝ち目はなかったでしょう。

そういう意味で、マケインは損な立場でした。それにも拘わらず、有権者についての得票率で46%を獲得したということは、アメリカという国のためにこれまで体を張ってきたマケインを評価する人がそれだけいたということでしょう。私は、今回のマケインへの支持はアメリカ人にも理屈抜きで情の世界があることを示したものだと思います。

9/11の直後に「目撃アメリカ崩壊」(文春新書)という迫力のあるレポートを上梓した、ニューヨーク在住の作家青木富貴子が11月

6日の朝日新聞のコラムに書いていたことによると、アメリカ政府の財政赤字は4,400億ドル(約44兆円)で、累積債務はGDPの3.5倍に上るそうです。また、朝日新聞の11月8日の記事では、2008年度の財政赤字は5,000億ドル(約50兆円)と見込まれており、その他に経常収支の赤字(輸出入などの対外取引の帳尻)は2007年度に7,116億ドル(約71兆円)だったそうです。財政赤字と経常収支の赤字は「双子の赤字」として以前から問題になっていたものですが、クリントン政権の最後の年度には、財政赤字は解消していたそうです。したがって、ブッシュ政権の政策が如何に大きな財政負担を伴うものであったかが分かります。

ともかく、アメリカの財政問題は非常に重い課題となって、オバマ政権にのしかかってきます。放漫な財政運営を行えば、そのツケは必ずアメリカ国民に跳ね返ることになるでしょう。この点は日本でも全く同じです。今、日本では、景気対策と称して、効果のほどはハッキリしないが将来の負担を増やすことは間違いのない施策が実行されようとしています。果たして、オバマ政権は何か別の考え方に立つ有効な政策を打ち出すことができるのでしょうか？もしそういう妙手があるのならば、日本も直ちに見做うことが必要だと思えます。

今年は、作家堀田善衛没後10年に当り、それを記念する企画があり、新聞には堀田の業績についての評論などが掲載されました。堀田は、「乱世」というものに目を

凝らした著作が多かった人で、私が好きな作家の一人です。最近新聞に掲載された評論のなかで、堀田の「定家明月記私抄」とその「続編」に触れたものがありました。私はこれらを未だ読んでいなかったもので、早速ちくま学芸文庫のなかの2冊を購入して読んでみました。「明月記」は藤原定家の50年にわたる日記であり、そのなかで、平安時代から鎌倉時代への移行を決定づけた承久の乱(1221年)後の世の中に触れたころがあります。この乱を起こした後鳥羽院は隠岐に流され、定家の知人である公卿のなかからも多くの犠牲者が出ました。京の都では葬儀が行われることが多かったのですが、その世の中の状況について、堀田は次のように書いています。

『この当時の様々な書き物に、たとえば、人の死に際して弔問に集まった人々が、かたみに別れ去って行くときに、屡々、悲しみにとざされながらも、かくてしもあるべにきもあらねば、と挨拶を交わして各自の生活に帰って行った、と記されている。かくてしもあるべきにもあれねば、帰られにけり。— 如何なる大事件があったにしても、人々の生活は続けられて行くのである。また、それは続けられて行かなければならない。(中略) 英語の成句で言うところの、Life continuesである。』 お祭り騒ぎのようなどころがあるアメリカの大統領選挙は終わりました。オバマを支持して活動した数百万人に上るともいわれるヴォランティアたちも元の生活に戻っていることでしょう。定家流に表現すれば、「あはれ、これ人の世のならひか。」というところでしょうか。

以上。